

下田歌子の『日本の女性』

— 鎌倉時代の女性像をめぐる —

佐藤 雅男

専修大学文学部兼任講師

はじめに

下田歌子（一八五四～一九三六）は、明治から昭和期にかけて活躍した女子教育の先覚者であり、歌人であるが、一人の思想家でもある。『日本の女性』は、大正二年の下田が六十才の時に「実業之日本社」から出版され、昭和八年に「下田歌子著作集 香雪叢書 第三卷」として増補改訂版が出た。この作品は、近代日本において最初に書かれた女性による女性の思想史である。¹

本稿では、まずは、『日本の女性』の第一章「序論」や第十二章の「結論」で、下田が語った方法論を取り上げる。そして、日本の歴史の大きな過度期で、著書の構成上の重要な切り結びである所の、第六章「鎌倉時代の婦人界」の内容を摘要する。また、第七章「鎌倉時代の婦人」の具体的な女性像をめぐる、下田の思想表現の特質を検討してみよう。

一、『日本の女性』の方法論

下田は第一章「序論」で、女性は、いずれの時代や国にあつても、男性とは異なる特質を持つという問題を次の様に述べる。

「女らしい女」と云う語を取つて、それに最も適当な条件を具備して居る婦人と、今度は「男らしい男」と云う語を取つて来て、それに最も適当な条件を具備して居る男子とを思い起して、此の二者を比較いたしますると、其処に大分の差がある事を知り得るので御座います。畢竟、理想の婦人と、理想の男子とは、その性質に於いて、その傾向に於いて、全然一致するものでない事は、丁度その容貌風采に於いても一致しないのと同様であるうと存じます。(7頁)

下田は「女らしい女」と「男らしい男」を、「理想の婦人」と「理想の男子」と言い換えて、その異質性を語る。「男女」という言葉は、「雌雄」よりも生物的に限定された人間的意味を持つ。下田の発言は、所謂「男の中の男」とか「女の中の女」に近似するニュアンスがある。だが、それを「両雄が並び立つ」と解釈すれば、言語的論理に矛盾が生じる。それはどこまでも雌雄として並立しなければならぬ。人間存在は男女共に、子供の頃から「くしく在れ」の教訓に矯正されて、性の同一性障害に悩む人々もいる。他者には、「くしく居て欲しい」、自己は「く

らしく生きたい」という願望は、人間的理想を高めるが、そのことが逆に抑圧になることもある。「らしく」とは、男女の他に「人間らしさ」、「自分らしさ」あるいは役割の形容として使用される。その根底には其々の自己実現への思いがあるが、そうした理想の実現は、如何にして可能であろうか。

一個の人間を、「男らしい女」、「女らしい男」と言えば、相互に異性としての特質は薄れる。それが果たして、あるべき人間性に結びつくかには疑問がある。二十世紀のイギリスの作家ロレンスは、『チャタレイ夫人の恋人』(一九二八年)で、「本当に異性と一緒になれる人間だけが、本当に孤独だ」という異様な思想を語った。そもそも日本語には、「夫人」と「婦人」にさえも、ニュアンスの差異がある。下田の「女らしい女」と「男らしい男」論の背後には、「男女は根本において、等根源的であり、同等且つ相補的關係にある」という思想がある。そこには、女性も女性らしさを失わずに、男性と並び立つべきの思いがある。それはロレンスの思想とズレがあるが、必ずしも相反するものではない。

武田清子は『日本文化のかくれた形』(フロイト・ユング・思想史)の中で、パーソナリティの形成に重要な働きをするものとして、ユングの原型(アーキタイプ)を、「第一に『ペルソナ』(the persona)。これは、俳優がつけるマスクのようなものともいえるし、グループや社会の要求(習慣や法律)に応じようとするグループ・ペルソナもあり、一人の人間が一つ以上のマスクをもっている。パーソナリティにおけるペルソナの役割は、有害な場合と有益な場合との両方があるとユングは考えている。第二に、“the anima”と“the animus”(即ち、男性中の女性的内部個性、および、女性中の男性的内部個性)、第三に、『影』(the shadow)、人間の動物的本性、危険な要素と創造性、深い洞察力などの源泉)、および、第四に、『自己』(the self、集合的無意識における中心的アーキタイプであり、パーソナリティの内部にあって人間の自己実現の道案内役をする)」の四つに分ける。³⁾

第一の分類に関しては、能や歌舞伎などの日本文化の特質であり、宝塚歌劇も女が男を演じることで、多くの支持を集めている。そこには、伝統に根ざした文化の持続的な生命がある。第二に関しては、「男らしい女」「女らしい男」という、ある種の両性具有的なものを人間は所有するという問題であろう。

そして何よりも武田は、第三の「影」という原型を強調している。「影」とは、人間の動物的本性を多く含み、それを抑圧することで、自己抑制のある人となるが、同時に、創造性や、強い感情、深い洞察力などの原動力が切断されることもある。「影」の働きにより、人間に活力や創造力が与えられ、それを拒否すると人格的個性が萎縮する。武田はユングの「影」という原型には、自我と無意識の領域とを媒介する人間論として重要な洞察があると言う。現代の性差に関する議論は、性別に関わりなく同一ということを強調して、異質性の価値を等閑にする傾向がある。老若男女の異質な特性の魅力が具体的に活かさなければ、第四の、其々の自己実現は不可能である。

下田の著作は華麗な漢文調が一つの特質であり、『日本の女性』の歴史社会的視圈は広く深い。その大筋を下田は、「先、太古（即ち神代）より上古奈良朝時分迄は、品位格式（英語のデイグニティ）を第一義として、平安朝に至りて之に加うるに美的趣味を以てしました。仮に略して品格趣味と申して置きましょう。そして一般的に情念偏重の時代でございました。それから鎌倉幕政以降明治維新に至る迄は節義貞操が第一義に代りました。之が即ち女性の支持した婦道の支柱であります。」と述べる。そうした歴史性を内在する日本の女性には、共通なる婦人性の特質があり、それは単に男性だけでなく、外国の女性と比較しても他に見られないものであると言う。下田が生きた明治維新から日清戦争の頃までは、日本は欧化主義の時代で、人々の心は無自覚的に浮動した。その渦中で、下田は過去の歴史や文学の中から日本の婦人性を具体的に帰納することで、自覚的に外来文化や思想の影響を批評し、比較し、取捨選択する方法を語る。

そうした発想の背景には、芳賀矢一の『国民性十論』がある⁴⁾。芳賀は、「保守である所は飽くまで保守である代りに利益であるところは直に採用して改める。大化の改新で支那の文物を入れたのも、明治の維新で、尊皇攘夷説が開港説に早代りしたのも皆この實際的方面の利益の為である。採長補短という事は日本人の長所である。日本は歴史上二度迄も階段の違った文化に出逢うことを余儀なくされた。併し、随分階段の異なった文化に出逢つても全く之に圧伏される事は無い。むしろ甘く之を調和して自己の用に供する。むかしの『和魂漢才』という語は即ちこれをいうのである。」(二三、現世的實際的) 86頁) の「採長補短」的方法に類似する。だが、洋才の素養も深い下田は、さらに日本の眼前の混乱状況を女性の目で細やかに見据えていた。

そして、日本社会が、更に混乱を来たしても、日本女性として、「永久に輝き渡る所の特質」があれば、それは「唯一無二の宝玉」であり、それを大切にする必要があると言う。その宝に立派な色彩や巧みな彫刻を施すべきであり、その根本の宝を無くして、単に色彩や彫刻だけに懂れるのは間違ひである。自覚した婦人は日本女性として、立派な根底を持たなくてはならないと言う。

下田は『日本の女性』研究の材料を、歴史の中に求める。だが、歴史性だけで婦人性を研究するのは不完全であり、国民性や婦人性の研究には、むしろ文学の方が、多くの材料を与えと言う。彼女は当時の『源氏物語』研究の第一人者である。文学には空想から出たものも多いが、『源氏物語』は平安時代の上流社会の日常生活を写實的に書いたもので、登場人物は、時代の思想を持ち、その風俗に従い、「生活をなしている形代」の一種だと言う。それ故に、文学と実世間とは、密接不離の関係を持つ。紫式部という作者も時代の人で、そこから色付けられ、同じ時代の空気を吸って育ち、思想の流れを汲んで生きていた。物語が虚構であっても、作品は時代の要求から出来たものである。下田は、「序論」を、日本女性の特殊性という事柄から説くが、それは次の様に柔軟な発想に着地

する。

本論に於いて申す事は、唯日本婦人にのみ独特のもので、欧米又は支那の婦人などには、絶対にない性質だと思つては、大なる誤解を来たすと云う事でありませう。社会の事情も違い、風俗習慣も違い、時代も違い、気候も違い、将た人種も違ふと云うのでありますから、一通り見た処では、その性質の上に、大きに違つた点のある事は申すまでもないのであります。併し、大体人間と云う点に一致して居り、国家を形り、毎日の生活も、共同的生活を行つて居り、親もあり、子もあり、夫もあり、妻もありますから、思想の如きも、大同小異であるべき筈で御座います。(17頁)

『日本の女性』には、「序論」から『英文学史』(一八六三年)を書いたテーヌや、第二章などにはプラトンや女性に対する差別思想を語つたアリストテレスも引用される。また各章の所々に外国の女性との比較がある。こうした発想は、歴史的個性の具体的な事例を蓄積しながら、そこに日本女性の特殊性を見出して、さらに普遍的価値に至らうとする発想である。たしかに下田の主張は芳賀矢一と同様に保守的側面があるが、それは偏狭で硬直した国民主義とは異なり、時代の変化を見つめる柔軟な活力に満ちている。それは、「まづ古より今に至るまでの、吾が日本女性の長所短所(特に長所に注意し)を仔細に調査研究して、そして其の長所を失はぬようにし、能く新色の外国思想文物の優良なるに混和し補足し、而も骨子は吾が旧來の善きを採つて確りとその根底を固くし、皮膚には彼新來の美を加えたならば、希くば完全に近き所の女性を得る事が出来るであらう、と密かに予期して居る次第であります。」(第十二章「結論」486頁)の言葉に方法論の根幹がある。それは外国の女性には、比較的に見る事が少

なくて、日本の女性には、明らかに意識されているような側面を具体的に抽き出すという方法である。下田はこうした方法論を『日本の女性』で実践した。そこには武田清子が、「全人類に共通な無意識の深所にある根源的規範の泉」という所を、探究する試みの一つであった。

下田の格調高い文体には漢学の影響が顕著であるが、読み難いものではなく、柔軟で不思議な魅力がある。ここでは、『日本の女性』に即しつつ、その華麗な文章を、こちら側の平易な言葉に置き換えて、その思想表現の筋道を理解してみたい。次に、神代から奈良時代までは、「品位格式」を第一義とし、平安時代からの「品格趣味」の情念偏重を経て、鎌倉時代から明治維新に至るまでの「節義貞操」という日本女性の支柱が語られた第六章の「鎌倉時代の婦人界」の部分を検討してみよう。

二、鎌倉時代の女性の特質

平安末期から鎌倉時代の天下の大乱は、「驚天動地」の時勢の変化をもたらした。源義朝の子の頼朝は、平治の乱で殺されるところを、平清盛の継母の池禅尼に命を助けられ、伊豆に流された。そして、時機到って兵を揚げ、恩顧の関東武士を率いて連戦連勝の勢で、遂に平家を西海の波底に沈め、鎌倉幕府を創立した。下田は、平安時代と異なる鎌倉時代の武士の特質として、一、父祖を崇ぶ気風。二、名誉を貴ぶ気風。三、忠節を生命とする気風。四、廉潔を主義とする気風。の四点を挙げる。しかし、それ以前の時代に、これらの思想が無かったのではなく、古代にも、こうした思想は見る事が出来る。平安時代の「驕奢偏狭」な社会に沈没していたものが、鎌倉時代に復

活した。こうした武士道の勃興は、この時代を一貫する思想である。下田はこうした日本の特質に関して、「日本人の血は、此等の点に於いては燃え易く湧き立ち易いのでありますから、鎌倉時代に於いて、その社会の要求と一致するに至り、炳乎として更に一層の光輝を増し加えた事は、疑うべくもない事実」と言う。

こうした気風は、武士たる男子の精神に止まるものではなく、社会勢力の中に生きる女性も、おのずから武士の思想の影響を受けた。この点において、鎌倉時代の女性は、それ以前に比べて、殆ど別の色彩を帯びている。それは、古代からあったものが一時的に沈澱していて、全く同じものの再興ではなく、幾分ずつ変化して進歩して来た。

平安時代には儒学も仏法も、表層的に花ばかりを摘んで果実を取らない傾向があったが、鎌倉時代には社会状態が急変し、人々の眼前に生者必滅の理が現出し、儒学や仏法の真理に接触せざるを得なくなった。平安時代に礼讃された女性が、鎌倉時代には抑圧される様になったのは、儒仏の思想の影響もある。打ち続く戦乱は、人生の悲惨を示し、巴のような特別な勇婦がいたが、大多数の女性は戦乱の渦中に、親や夫の陰で僅かにその生命を繋いだ。即ち戦場に功を奏する男性が重んじられて、足手纏いの女性は軽んじられた。

従って鎌倉時代の女性は、平安時代の「物のあはれ」を感ずる性情は変化し、優美な趣味は欠乏してきた。鎌倉時代の女性に特徴的なのは、白拍子の階級である。それは一種の芸妓で、身は白い水干と立烏帽子を着て、舞や歌で王侯貴人の宴席にも侍った。白拍子の中には、身分が低いにも係らず、技芸に秀でて、客の前に出れば、当意即妙の今様を歌い舞う者がいた。それはヨーロッパの即興詩人に比せられる存在で、『平家物語』には、祇王仏御前の話がある。平清盛の邸宅に、僅に十六才の若さで、平気で押しかけた仏御前の白拍子気質は、実に大胆である。清盛は追い返そうとしたが、祇王の取りなしで、仏御前は「君を初めて見る時は千代も経ぬべし姫小松 御前の池なる亀岡に鶴こそ群れ居て遊ぶめれ」と即吟して舞った。清盛の愛は忽ち祇王を去って、仏御前に移った。

石母田正は『平家物語』の作者は、女性の描写が類型的であり、貴族階級の女性の描写も非個性的で、巴のような性質の女性も同様と見なす⁽⁵⁾。夫婦相愛の離別の場面が、物語の中で何度も繰返されるが、それも類型的であり、単調で効果があがっていないと言う。石母田は、平安時代の物語と比較して言うのだが、建礼門院などは、単なる類型ではない。類型とは「らしさ」という属性をさらに抽象化した形態である。そこに含まれる理想化の意味を無視しては、その時代の女性の魅力は把握出来ない。石母田は白拍子の祇王に関して、女性としてよく描けていると評価する。だが、そうした一個の女性らしさとは、如何なるものかには言及していない。

白拍子の中でも、義経の寵姫となった静は、鶴岡八幡宮で頼朝の前に立って、義経を慕う歌を、恐れ気もなく舞った。静に関しては、下田が情熱的に語った女性の一人であり、後で詳しく触れることにしよう。このような芸妓が敬愛を受けた例は、ギリシャ時代にもあり、それはヘテラという女性階級で、恰かも日本の白拍子に似ている。ヘテラも歌舞音曲で男性の歓心を得て、次第にその勢力を高めた。下田は、鎌倉時代に白拍子が社会の注目を惹いた原因を、一、社会の中心点が移動した事。二、当時の社会の趣味に投じた事。三、家族的生活の欠乏に応じた事。四、趣味の欠乏を補はれた事。とする。

鎌倉幕府は戦争も無くなり、時代が少し泰平になると、幕僚の男女間を取締りを厳しくして、儉素を主とし、武備を盛にして、社会の破綻を来たすまいと勉めた。故に鎌倉時代の女性には、「志操の固い品石の正しい者」が登場したが、平安的優雅な趣味は欠乏してきた。それで鎌倉武士の家庭は地味で堅実で、実利主義の主婦を有した。ここに於いて、その欠乏した趣味と娯楽を埋めるために、白拍子のような女性が歓迎される事になった。下田は、平安時代と鎌倉時代の女性は、その年代からは、それほど隔りはないのに、性格的には一変したかの現象が認められると言う。そして鎌倉時代の女性の特徴を、一、意志的と感情的。二、守節と再嫁。三、実用的と趣味的。四、

婦人を物件視する風。と分けて、第七章「鎌倉時代の婦人」で語る幾人かの女性の名を挙げる。次に、下田の分類を基にしながら組み換えて、①、意志的な女性。②、女性の貞操と再婚。③、歌人としての女性。④、実用的且つ趣味的な女性。の角度から、主要な女性像を具体的に検討してみよう。

三、鎌倉時代の個性的な女性像

① 意志的な女性

平安時代の女性が感情的であったのと比べて、鎌倉時代には、多少とも理性の力が交わり、強固な意志を持った女性が登場した。下田は、前者は「緩き流れに垂る、藤の花」のようで、後者は「雪中の梅」のように、義を見ては死をも恐れない武士的気風で、男性的色彩を帯びる女性になったと言う。先の、武田清子の原型では、「第二の、*“the animus”*（女性中の男性的内部個性）」の現出である。両者の区別は、小督局と静御前に顕著である。また「華奢柔弱」な宮廷にも、意志的な女性が現れた。阿仏尼は、我が子を助ける為に、鎌倉に下向して奪はれた所領を取り返す訴訟を起した。また鎌倉時代の婦人の性格を代表するのは、平政子である。頼朝の大事業も、政子の後援によるものが多かった。先ずは、平政子から見よう。

政子は、北條時政の長女で、容貌は美しく、気性も高く、幼少の頃から才智に勝れていた。源義朝は平清盛に亡され、長子悪源太も殺され、弱年の頼朝は捕えられ斬罪と決まった。しかし、清盛の継母池禅尼に命を助けられて、伊豆に流された。伊東祐親の監視下に置かれたが、頼朝は祐親の娘と懇意になり、一子をもうけた。祐親は平家の

思はくを恐れて、その子を殺し、頼朝をも殺そうとした。ところが頼朝は祐親の二男祐清に救はれて、北條時政の家に身を隠した。

時政には人を見る眼があり、頼朝が自分の最愛の娘である政子と相思の仲になったのを、知らぬふりをしていた。兎角するうちに、以仁王の令旨があり、頼朝は兵を石橋山に挙げた。しかし、大庭景親の兵に敗退し、山中に隠れながら、ようやく安房国に落ちのびた。それから再度兵を集め、ここに始めて関東勢を率いて、都に攻め登る事になった。政子は、頼朝の惨憺たる時代から、常に傍らにいて、その困苦欠乏を共にした。

平家は遂に滅び、天下は頼朝の統一する所となった。その妻としての政子に、如何に威力があったかは、『吾妻鏡』や『北條九代記』に散見している。頼朝が狩をした時に、長子の頼家を連れて行った。その狩場で、十二歳の頼家が一匹の鹿を射とめた。頼朝は大いに喜び、はやく母にも知らせ喜ばそうとして、鎌倉に使者を立てた。だが、政子はそれを聞いて、「頼家は幼しと雖も將軍の嫡子なり。一つの鹿を獲たりとて、何故に急使を煩はし給ふやらん」と言つて、不興な顔をした。下田は、こうした逸話に政子の「厳格な家庭教育」を読み取っている。また、勝気で進取的な政子は、嫉妬も烈しく、『吾妻鏡』にも、頼朝が始末に困った話を書いてある。（第二卷 寿永元年十一月「亀の前事件」等々）政子には、実に確固不拔の強い意志があった。

また政子の威力を知るのに、極めてよい材料は、一二二年の承久の乱の処置である。当時は源氏の血統は滅びて、將軍はまだ幼く、幕府の実権は、尼將軍の政子と執権北條義時の手にあった。北條氏と反目した豪族は、大半は滅びた後であった。だがまだ、北條氏の専横を憎む者も多くいて、内部からの反乱が不安な状況であった。そうした危急の場合に処して、政子は在府の武士を幕府に集めた。諸侯が一堂に会し、政子は上壇に座を占めて、嚴かに都に於ける騒動の状況を語った。下田は、『北條九代記』の一節を次の様に引いている。

故殿（頼朝）に逢ひそめし時は、親の為に疎み悪まれ、平家の軍には手を握り心を砕き、既に平家亡びしかば、世の中豊かに成りぬらんと思ふ程に、幾ばくならで姫君（長女大姫）に後れ、打ち續きて右大将（頼朝）に離れ参らせ、その思ひ遣る方なし。右大将殿さへ失せさせ給ひしかば、今は世に住みてある甲斐なしと思ひ乱れしを、権太夫（義時）申す様、若し只今空しく成り給はば、鎌倉は荒野となり鹿の棲所となるべし。さて諸国の思ひ立ちて背く者あらば、三代將軍の遺踏皆亡びて、誰か後世をも弔ふ人のあるべきや。それに思召し立て、御身をも捨てられれば、義時先づ自害いたすべしと歎きしかば、力なく今日まで存らへ、斯る事を見聞くこそ悲しけれ。諸国の侍ども故殿の御恩身に余りて御情深く蒙りたり。それを忘れて京方へ参らんとも、亦味方に留まりて故殿の御恩を報ぜんとも、唯今慥かに申し切れ。」（『北條九代記』卷第五 建保七年二月 二位禪尼評定）

下田は、「最後の一言は凜乎として、婦女子の言とは思はれぬ程で、眼中既に一の敵なき慨があるではありませぬか。」と言う。和辻哲郎は『日本倫理思想史』（二）の「第三篇 初期武家時代における倫理思想 第二章 坂東武者の習い」で、『吾妻鏡』（承久三年五月）では尼將軍の政子は簾中において、秋田城介をして武士たちに説かせたのを、『承久軍物語』（群書類従 三七〇）や、『承久兵乱記』（続群書類従 五七二）には、政子自身が、武士たちを口説く場面が興味の中心になってくるという問題を綿密に論じている。それは、「承久軍物語では、二位の尼が北条義時と三浦義村との前でおのが身の不幸を嘆き、一生を回顧しつつかき口説くことになっているのに、承久兵乱記になると、この口説きが庭に充ちた大名小名の前で、公然と行なわれたことにされているのである。その口説きも、いかにも女らしい愚痴をませて描かれている。」という指摘である。

和辻は『承久軍物語』で政子が義時の前で語った一節を、「最後に残った実朝さえも、ついには暗殺されたのである。今こそほんとうに最後だと思いつていると、それをとどめたのは義時であった。將軍頼朝の名残りとしては、あなたのほかにも誰もいない。あなたのおかげで世の中が治まっている。あなたが死ねば鎌倉は盗賊の棲家になるであろう。三代將軍の菩提をとぶらう者もなくなるであろう。ほんとうに決心されたのであるならば、まず義時が自害してお供つかまつろう、といって、昼夜側を離れなかった。その情にほだされて今まで生きのびていたのに、今またこのような憂き目に逢うとは、何という不幸なことであろう。」と口語訳して、続けて次の様に言う。

こういう女らしい述懐が、果たして真実に、この大事に際して、幕府主脳部の相談の席上で、あるいは大衆の面前で、行なわれたであろうか。少なくとも吾妻鏡はそれを証拠立ててはいない。しかも後の記者が熱心にこの述懐を書き立てているのは、それが鎌倉時代の武士の感情に最も強く訴える仕方であったからであろうと思われる。

これは和辻が鎌倉時代の、「国家よりも主君が重大であるという思想」を論じる過程で言った事柄である。和辻は、「女らしい愚痴」「女らしい述懐」という言葉で、政子の私的內面的心情を感性的に描写した。ここで和辻は「女らしい」という言葉を、かなり意識的に使用しているが、少なくとも理想的の意味では使っていない。

このことは、中村雄二郎が『述語集』の「19 女性原理―阿闍世コンプレックス／母権制／グレート・マザー」で、「アリストテレス、デカルト、カント、フロイトといった人々の、原理的な次元に及ぶ女性観を通覧してみても、あらためて、余りにも〈哲学の知〉に一貫して反女性性が見られるにおどろかされた。」と指摘する問題に関連

する。和辻の言い方は、内村鑑三が、「源氏物語が日本の士気を鼓舞することの爲めに何をしたか。何もしないばかりでなく我々を女らしき意気地なしにした。あの様な文学は我々の中から根コソギに絶やしたい。」(『後世への最大遺物』)ほど否定的ではないが、「女らしい」という言葉を価値肯定的に使用してはいない。

丸山真男は、川端康成の『女であること』の小説を挙げて、そこには女性の微妙な感覚の動きや細かい心理が伝わって来て、「女らしさ」について様々なイメージを思い浮べることが出来、もちろん「男らしさ」という言葉もありイメージもあるが、「どうもやはり男と女との間にはちがいがあ」と言う。そして丸山は『男であること』というのは小説の題名としては不自然で滑稽な感じがあると述べる。その理由は、「男性の方が社会的に多様な活動をし、多様な役割を演じているのに対し、女性とくに家庭にいる女性は、妻としての役割、母としての役割が大部分であり、したがって、女『である』ことから、女性の行動様式が『自然に』でて来る面が比較的が多い」とことが背景になっている(『日本の思想』「IV 『である』ことと『する』こと」岩波新書)と述べる。『男の一生』という正宗白鳥の小説も存在し、丸山の論にも多少の偏りがあるが、ここでは少なくとも「女らしさ」と言う言葉は肯定的に使われる。

政子という一個の尼將軍は、歴史的社會に於いて、このまま、いつ死んでもいい、というように何かを思い切つて現場に処した例外的な女性である。そこには武田清子の原型論の「第三に、『影』(the shadow、人間の動物的本性、危険な要素と創造性、深い洞察力などの源泉)」の存在の意味が濃密である。

和辻が、相対化しながら引用した尼將軍の最後の言葉、「かかる御なさけふかき御心ざしをもわすれまいらせ、今度京がたの御かた仕らんか。また関東に御奉公仕らんか。ただいまたしかに申しきれ」(『承久軍物語』)また、「宣旨にしたがはんとおまはれば、まづあまをころして、鎌倉中をやきはらひてのち、京へはまいり給へ」(『承久兵乱

記』にしても、鎌倉武士たちの心を揺り動かした迫力に満ちた呼びかけである。「一命をばまいらせをくうへは、ちからのをよばんほどはせめたたかひ、かたきの陣をまくらとして、うちじにせんより外の事候はず。」（『承久軍物語』）また、「やがて明日うつたちて、いのちをきみにまいらせて、かしらをにしにむけてかかれ。」（『承久兵乱記』）という武士たちの政子に対する二様の答え方も、女性としての思いあぐみの深みから身を起こして、何かを振り切つて、生存の命に筋を立てて表現した政子に、直接事実として心服せざるを得なかつたという点では同様である。

『吾妻鏡』（承久三年五月）や『承久軍物語』（群書類従 三七〇）や、『承久兵乱記』（続群書類従 五七二）などの文献作者の意図以前に歴史的事実がある。その核心には女性としての平政子が居た。歴史を動かした要因の一つに、ある種の「影」を背負つた政子の自己実現の思いがある。そうした歴史の真相の直覚は、文献作者たちの無意識に潜んでいて、それが文献に見え隠れ的に現出する。そうした政子という具体的個性の存在の重さの確認の先で、和辻が言う所の、「武士たちの主従意識に根ざした献身の道徳は、武士たちの直接の主君に即したものであつて、天皇尊崇の伝統とはかかわりがない。武士たちの間で『忠』と呼ばれたのは、直接の主君への献身的態度であつた。」という歴史的社会構造の問題を考える必要がある。

そして下田は、政子は余程意志の強い女性であつたが、何処から何処までも「無情冷酷」な人ではなかつたと言ふ。白拍子の静が鎌倉に捕はれて、頼朝の前で舞歌を演じた時、政子は頼朝の激怒を宥めて、むしろ、そのような境遇に立ちながらも、「凜として犯し難い静の操」に同情した。そこには女性らしい優しさがあつたと述べる。しかし、実子の頼家や実朝までも失つたのは、政子が覇気に駆られる事の多かつたためであり、「慈母たるの徳」は全うしていないと言ふ。こうした下田の人間理解は、女性ならではの細やかさである。

政子は「家庭的成功者」でなくて、「事業的成功者」である。位は従二位に進み、世には尼將軍と称せられ、六才で亡くなった。彼女は平安時代には夢にも見ることも出来ない、新しい女性であった。

②女性の貞操と再婚

女性が、貞操を尚ぶという事は、鎌倉時代に始まった訳ではなく、古代からある。だが、中古には情的觀念が盛になり、貞操よりも寧ろ趣味に重きを置く傾向があった。しかし平安の趣味的生活に必ずしも貞操が不必要であったのではない。それを「婦徳」の第一義としていなかったと下田は言う。鎌倉時代の氣風が、男女共に強烈な意志を貴ぶ所から、「意氣張的」に貞操を立てたのである。だが、武士の妻が再婚する事を、後世の様に絶対にあるまじき事としてはいない。そして巴が、義仲の死後には和田義盛に嫁いだという説もある。ここでは、そうした巴を取り上げてみよう。

巴の父は中原兼遠で、今井兼平は兄であり、共に木曾義仲の忠臣である。巴は幼少から武芸に達し、如何なる荒馬も乗りこなした。生長して義仲に寵愛され、戦場に出ても大将となって、勇婦の名を恣にした。

寿永二年（一一八三年）五月十一日に木曾義仲は、兵を北陸道に進めて、俱利伽羅峠に於いて、平家の大軍を破った。この時も巴は大将となって兵千余騎を指揮した。義仲は北陸道を席捲し、京都に入った。平家は幼帝を連れて都を落ち、義仲の名は轟いたが徳望がなく、宮中の役人にも笑はれ、京都の人々からは残酷な野人と見られた。義仲は頼朝とも不和になり、義経と範頼の討手をさしむけられた。そしてついに、粟津が原で果敢ない運命を遂げた。その最後まで、巴も義仲の身边を離れなかった。義仲が宇治川の敵に当たった時、巴は有力な大将として防戦した。『平家物語』に、その時の巴の奮闘の様子は、「木曾は信濃を出でしより、巴、山吹とて二人の美女を具せられ

たり。山吹はいたはりありて都に止りぬ。中にも巴は色白う髪長く容顔誠に美麗なり。屈竟の荒馬乗の悪所おとし、弓矢打物取りては、如何なる鬼にも神にもあふと云う一人当千の兵なり。」（第九卷「木曾最後」とある。

さて巴は最後の戦で、義仲の手勢が僅か五人になるまで残っていた。義仲は巴にむかい、「其許は女の事であるから、早く何方へなりとも落ち延びよ、義仲ともあるべき大将が、最後に女を召連れたりと言はれては、末代までの耻辱なり」と言った。そして巴は、「あまりに強ういはれ奉りて、あはれよからう敵がな。木曾殿に最後の軍して見せ奉らんとて、控へて敵をまつ所に、爰に武藏国に聞えたる大力、御田八郎師重、三十騎ばかりにて出で来たる。巴その中へ破つて入り、まづ御田の腹に押しならべ、むづと組んで引き落し我が乗りたりける鞍の前輪に押しつけて、些とも働かさず首ねぢ切りて捨て、けり。」であった。

永井路子は『平家物語の女性たち』で、都人である『平家物語』の作者には、木曾とは異質な暴力集団であり、都人には野蛮人に征服されたような半年間であったと言⁽⁷⁾う。都人は地方人が都を制圧する現実を目のあたりにして、木曾に対する違和感は最後まで深まり、むしろ鎌倉勢の方に柔軟なものがあつた。そして「記憶の中の木曾勢は、ますます異邦人的なものとしての印象を深めてゆく。そしてこのあたりに、巴のような女武者の話を生み出す素地があつた」と言う。

また巴が鎌倉へ連れてゆかれ、和田義盛と再婚し、朝比奈三郎義秀を産んだというのは、「当時のもう一人の勇婦、板額の話とないまぜになつて生れた伝説」と見なす。そして、「彼女の相手となつたといわれる和田義盛は、鎌倉の侍所の別当だから、いわば陸軍大臣といった重要な地位をしめる人物。のちに実朝の時代になつて叛乱を起し、北条氏にほろぼされる。このとき、彼の子の朝比奈三郎は奮戦し、遂に誰にも捉えられずに行方をくらました。この朝比奈三郎は、以前から大力、剛の者という評判が高かつたので、巴に結びつけられたのであらう」と指摘す

る。

平安時代には一時は沈淪した日本女性の活力を再び回復して、それ以前にも見ることもない活動を演じた巴の勇婦性は突出している。だが下田は巴に関する描写の最後で、「併し此の種の女性は決して後天的教育のみにては出来るものでない。全く先天的不可思議なる凜性の然らしむるのであります。所へ、世態が又戦乱の世となったのでありますから、斯かる稀有の婦人を出した次第でありましょう。で、愉快なりとて通常の婦人が濫りに企て望むべきものではありません。」と結ぶ。こうした「愉快なり」という文学的実感を相対化するペルソナ的自己にも、教育者としての下田の態度は伺える。

③歌人としての女性

建礼門院は名を徳子と言い、父は平清盛である。後白河法皇の猶子として、高倉天皇の中宮であった。彼女は、人生の浮沈を経験した劳しい女性である。出産の時には、高倉天皇が使を全国の寺社に遣し、法皇自身が千手経を誦し、安産を祈った。この時に産れたのが安徳天皇である。しかし、平家の栄華は夢と覚めて、建礼門院の運命も急転し、ついに悲惨の幕で終わった。

寿永二年に、平家の一門は壇の浦に沈んだ。この時に建礼門院は、安徳天皇と相前後して海中に飛び込んだが、源氏の兵が熊手を以てこれを引き上げ、京都に連れ帰した。彼女は吉田の僧房に身を寄せて、真如覚と号し、仏道を修していた。だが都に近い住居は憂愁の種ばかりであると思ひ、大原の寂光院に入った。法皇はその住いを訪れよう思つても、幕府を憚つて志は遂げられなかつた。文治二年に、補陀洛寺に御幸ということにして、その道すがら寂光院を尋ねた。『平家物語』に、「女院の御庵室を御覧ずれば、軒には蔦藟這ひかゝり、しのぶまじりの忘草、

瓢箪しば、むなし」（「灌頂巻」大原御幸）とある。建保元年十二月に建礼門院は、五七才で大原の里で亡くなった。鎌倉時代の女性像という角度から、他の日本思想史家の発言を検討してみると、そこには石母田正の類型論的な指摘が多い。津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（三）、「第5章 道徳思想―武士と恋愛」は、「戦記ものの恋物語には、昔の貴族文学には無い題材として、白拍子とか遊君とかいう特殊の階級の女が現はれる。常磐・祇王・祇女・千手・静・虎、皆それである。これは彼等が武士に愛せられ、従って事実として彼等に対する恋愛諺が存在していたためであらうが、平安朝に於いては概して遊女などが単なる玩弄物であって、才芸を賞せられることはあっても人間として取り扱はれなかったに反し、戦記ものに於いてはそれが何れも武士はぶかしき立派な人間になって注意しなければならぬ。」と、鎌倉時代の女性のことを「武士（男性）はぶかしき立派な人間」と肯定している。だが女性の概括であることでは、石母田正と似ている。鎌倉時代は重量感のある思想史では、一般的に仏法の成熟と言う角度から論じられ、具体的な女性像の描写や、その意味の言及は抜け落ちていく。家永三郎の『日本文化史』では、全くと言っていい程、触れられていない。和辻哲郎の尼将軍政子に対する論述は、例外的にかなり立ち入ったものの一つである。

それに対して、永井路子の、建礼門院という女性に対する、「よろこびも悲しみも、彼女の心の中には、さして深くは突き刺さって来なかったのではないか」の指摘は興味深い。世の中には意外にそういうタイプの女性がいて、他人から見れば波瀾万丈の生活を送りながら、感情の振幅が少なく、その故にかえって傷つかず、没落した後も生きつづけられたのは、そうしたタイプだったのではないかと言うのである。そして、永井は、「実は彼女と北条政子は同い年かあるいは一、二才違いなのだが、政子の激しさと比べてみると、建礼門院の性格ははつきりすると思う。北条政子は人を激しく愛し、激しく憎み、そして自分もずたずたに傷ついた。形の上では将軍夫人となった

政子は勝利者で、建礼門院は敗北者だが、そのどちらが心の底まで傷ついたかは簡単にはいえないような気がする。」と述べる。建礼門院は文章詠歌に巧みな歌人であり、下田は次の様な歌を引く。「我が宿の八重山吹の夕映に井手のわたりも見る心地して」「夕されば夏野の草のかたなき涼みがてらに休む旅人」「真柴ふくねやの板間にもる月を霜とやならふ秋の山里」「いかばかり山路の雪の深からん都の空もかきくらしつゝ、」こうした叙事に徹した所に、孤独な寂しさが滲んでいる。こうした叙事詩に、人生の浮沈の辛さが表現されているとも言える。だが、もう一方の極の政子の存在と対比しつつ、その感情の振幅の度合いを測るという発想は、これも女性ならではの個性的な発言の一つである。

下田は『十六夜日記』の作者を語る。大正二年の初版本では、一、平政子 二、阿仏尼 三、建礼門院の順番で語られたが、昭和八年の改訂版では、八、阿仏尼 九、松下禪尼というように、最後から二番目に語られる。そこには下田の阿仏尼の評価が微妙に変化した痕跡がある。阿仏尼は平度繁の娘である。始めは順徳天皇の后安嘉門院に仕え、後に藤原為家に嫁いで、為相を始め五人の子を産んだ。そして夫の為家に死なれ、剃髪した。為家の家は、代々和歌の名門であり、為家の父は定家で、祖父は俊成である。

俊成以来代々に歌道の司をしている恩賞として拝領したのが、播摩国細川庄と近江国小野庄とであった。為家は、初め、これを長子の為氏に譲った。ところが、為氏は父の為家の意に逆った故に、所領を父から奪い返された。そして為家は、これを弟の為相に与えた。為氏は阿仏尼に取っては実子ではなく継子であった。為氏は長子の自分が継ぐべき莊園を二ヶ所までも、異母弟の為相に取られたことを心外に思い、どうかして弟の手から奪い取りたいと思っても、父の在世中には、悪計を回らす事は出来なかった。そのうちに父の為家が世を去った。その莊園を所領する為相はまだ若年であり、為氏は、それを奪った。

実子為相の母である阿仏尼は、莊園は、為家が徒らに為相に与えたのではなく、それを以て家門の名譽も保ち、和歌の道を究めよということである。それを為氏に奪はれては、亡き夫の為家の思いにも背き、為相一家の難儀になると思った。阿仏尼が様々に説諭をしても為氏は返さない

阿仏尼は、実子の為相の所領裁判を鎌倉幕府に訴えるために、老いた身を起して、鎌倉に赴いた。そして鎌倉で事の仔細を訴えたが、はかばかしい判決も与えられず、四年を経て、弘安六年九月に世を去った。その後、莊園は実子の為相の所有となり、没後に遺志を遂げたのである。

文人としての阿仏尼の文章は平安式であるが、何処となく鎌倉風で堅実な処がある。漢学の素養もあり、和歌の識見も深かった。下田は、阿仏尼に深く共感している。そこには確かな母親像が描写されている。そして『十六夜日記』から、「我がことも君に仕へん為ならで渡らましやはせきの藤川」「誰が方になびき果て、か富士の峯の煙の末の見えずなるらん」「ゆかしさよそなたの雲をそば立て、よそになしたる足がらのやま」などの歌を引く。

④ 実用的且つ趣味的な女性

平安時代の女性は趣味的であったが、それと比べて鎌倉時代の女性は実用的であった。実務を執つて来た武士の妻として、必然的に実用的でなければならなかった。頼朝夫人の政子が、最も実用的な人格であり、活動主義の女性であった。また木曾義仲の側室の巴は、戦陣に立つて男と勝負を争った。それは平安時代の女性が夢想さえないかだったことである。その他にも義経が堀河御所で土佐坊に攻め寄せられた時の、静の落ち着き払った態度、あるいは土肥実平の妻が、夫が頼朝に従つて石橋山に隠れた時、彼女自ら軍兵の中に立ちまじつて活動した事など、男も及ばない気性の女性がいた。

当時の武家の氣風として、風雅や趣味よりは、實際に役立つ実践の事を好んだ。この過渡期には、新たに起った武家思想と、平安の遺風とが混淆して、一方に儉素の鎌倉風を喜んで、他方には華奢の平安とも離れられなかつた。そして時代は、鎌倉風の実地的婦人を要求する方向に進んで来た。ここでは、まず静という白拍子を取り上げてみよう。

静は義経と離れがたい女性であつた。下田は、鎌倉時代の白拍子として、「貞操卓絶、氣概拔群」の点で、当時の女性を代表していると言う。静の母は磯禪尼で、当代に名高い白拍子であつた。静は美貌の持主で、姿態も温雅で、都に其の名を恣にした。

かつて一年の早が続き、都の人々は苦しみ歎いた。その時、後白河法皇は二条の神泉苑で雨乞の折袴をして、白拍子を百人集めて、奉納の舞樂を奏した。その中で、静の實際秀でた舞の手振に、天は俄かに曇り、大雨が降つた。それで法皇は、「あはれ日本一の白拍子よ！」と賞賛した。静が義経の側室になつたのは、此の時の縁である。静は運命の神に結び付けられた良縁を喜び、忠実に義経に仕えたが、彼女は不幸で薄命であつた。平家が滅びて、鎌倉に幕府が開かれた頃から、頼朝は義経を憎み、梶原景時の讒言もあつて、兄弟は呉越の間となつた。頼朝は義経を殺そうと考えて、土佐昌俊と云う豪僧に、入浴させた。ある宵に、昌俊は不意に義経の堀河の邸を襲つたが、静は警戒すべき宵である事を察して、少しも狼狽せず、直に義経の室に行つて鎧を着せ、自ら邸の中を駆け廻つて、人々を呼び起した。昌俊は忽ち打ち殺されたが、この為に義経と頼朝との間は、益々隔たつてしまつた。義経は僅かな臣下を率いて、静もその一群に加わつて都を落ちる事となつた。

主従は漂泊して、吉野に入った。荒猛者や悪法師が兵を集め、義経を搦め取つて恩賞に預ろうと攻めてきたが、義経は此等を打ち破り、吉野山の奥深く分け入つた。最早この上は女性は足手纏いであり、静も一緒に行く事は出

来なくなり、吉野山で義経と別れた。義経は、静を無事に都に送らせる為に、黄金数枚と五人の雑色をつけたが、この無位の役人どもは、黄金を奪って、静を捨てて逃げ去った。静は雪の中に泣き倒れていたのを、吉野の悪僧に見出され、京の六波羅に送られた。彼女はその時、妊娠の身であった。それで静は母の磯禪尼と共に、鎌倉に護送された。文治二年二月十四日に、静は鎌倉に到着した。そして頼朝に義経の在所を尋ねられたが、知らないと言ふより外はなかった。

頼朝は、静が妊娠しているのを強く気にかけて。戦国の習いで、男子であったならば、如何なる復讐をなすかも知れない。兎に角、出産までは鎌倉に止まれと命じて、母と共に逗留する事となった。この間の事であるが、頼朝は、静が日本一の白拍子である事を知っていて、その舞を奏する事を強請した。さて当日になると、鶴岡八幡宮は、それを観に来た武士で満ちていた。頼朝は政子と共に簾中において、今や遅しと静の出場を待っていた。そこで静は舞殿に上り、神々しい美しさで登場し、白拍子の吉例として、君が代を寿く舞を一さし舞った。一座はさながら酔えるがごときで、その軽妙な舞に見とれた。

やがて第二の舞が初まった。静は悠々と座の正面に進み、簾の中に瞬もしないでいる頼朝の方に眼を注いで、「吉野山峯の白雪踏みわけて入りにし人のあとぞ恋しき」、更に節を変化させて、「しづやしづせ賤のをだ巻繰りかへし昔を今になすよしもがな」と歌った。それは義経への恋慕の歌であり、その声調の悲しさは、衆人の袖を濡らした。しかし、頼朝は、「我が面前に於いて、我が敵なる義経を恋ふる歌を奏するは、即ち我が身に抵抗ふなり。女なりとて斯かる無体を許さんには、幕府の威信地に墜つべし。速く速く息の根止め候へ」と激怒した。静は満座の前に頼朝を侮辱して、命を捨てる覚悟であった。頼朝は飽くまで静を罰しようとしたが、政子は妻として夫を思うは女性性の至情であり、自分は之に同情せずにはいられないと切に之を止めた。それで死に処する事だけは許された。こ

の時、静の年は十九か二十であった。かくて鎌倉に半年余り居て、静は子を生んだ。生まれた子は不幸にも男子であり、直ちに殺された。そして義経も奥州で戦死した報が伝はり、静は仏門に入つて亡き人の菩提を弔らうために都の天龍寺の片傍に庵を作り、一生を行い澄まして過した。そして静の余生は短かった。

第七章「鎌倉時代の婦人」の最後には、勤儉の模範として松下禅尼が語られる。そして「北條泰時が昼食に味噌を用いたと云う話、又は北條時頼が身天下の執権職でありながら、一簣一笠の姿で天下を巡遊したと云うが如きは、何処までも鎌倉武士の風儀を表はしたものと申さなければなりません。」と言う。北条時頼が宵の酒に味噌を嗜んだ話は、『徒然草』（二十五段）にあり、質素な身なりで諸国を回つた伝説も、謡曲『鉢の木』で有名である。

松下禅尼は時頼の母であり、時頼が質素儉約を旨として、自らを模範として人々を率いたのも、この母の感化が大きかった。下田は「惜しい事には、禅尼の伝記の詳しい事は今残つて居りませぬ。唯以下に述べる一の逸話が、禅尼の性格と行爲とを遺憾なく表はして居るものとして、永久に残るべき美談処訓であります」と前置きして、次の様に語る。

松下禅尼は秋田城介安達景盛の女であります。或時その子時頼の待受をすると云うので、夙くより室内の掃除やら手入やらを致しました。禅尼は其の時、親ら明障子の破目を繕つて居られました処へ、兄の義景が参つて之を見まして、「所まだらにては見苦しく候はん。皆を張り換へ給はんこそ然るべう覚え候へ。且かゝる事を下り立ち自らものし給はずとも、誰そに命ぜ候へかし。」と申しました。すると禅尼は、「いなとよ。尼も遂にさこそは思へども、凡そ物は小破の時に繕へば、大破に及ばずして事済むもの、万づに儉かにして励み勉むべき心ばえを若き人に知らしめん爲にとて、斯くは行ひ候ふぞ」と申されましたから、義景も其の理りに感服し、再び言う

べき詞も無くて退いたと申すことであります。此の母の感化は、よく其の子に及んだものと見えまして、時頼の時代は北條九代の中でも、質素儉約の主旨が殊に能く徹底して、最も民治に好成绩を挙げたのであります。（266頁）

この逸話は、『徒然草』（百八十四段）にもあるが、それは兄義景の発言として下田が記述した、「所まだらにては見苦しく候はん。皆を張り換へ給はんこそ然るべう覚え候へ。」とは異なる。『徒然草』では、「給はりて、某男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候ふ」と申されれば、『その男、尼が細工によも勝り侍らじ』とて、なほ、一間づ、張られけるを、義景、『皆を張り替へ候はんは、遙かにたやすく候ふべし。斑らに候ふも見苦しくや』と重ねて申されければである。後半部分も、禪尼の発言として下田は、「凡そ物は小破の時に繕へば、大破に及ばずして事済むもの、万づに儉かにして励み勉むべき心ばえを若き人に知らしめん為にとて、斯くは行ひ候ふぞ」と記述する。『徒然草』では、その部分は、「尼も、後は、さはさはと張り替へんと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて、心づけんためなり」である。下田は何を典拠にしたのであろうか。

『前賢故實』（菊池容齋 卷第八、雲水無尽庵、一九〇七年）に、「松下禪尼、安達氏。秋田城介景盛女。北條時頼母也。嘗為時頼設食、兄義景來經營。尼方手裁紙糊補障子、義景曰『請命人為之。』尼不顧。義景曰『補之不如新之之省勞。』尼嘆曰『我豈不之知乎。凡物有小損、早補之。則不至大壞而止。今此小損、改而新之、以奢侈示後輩也。』義景赧顏退。時頼克守勤儉、政理寧靜、亦母訓誨之使然也。」がある。下田の「凡そ物は小破の時に繕へば、大破に及ばずして事済むもの」は、『前賢故實』の「凡物有小損、早補之。則不至大壞而止。今此小損、改而

新之」の意味合いに照合する。これは一つの抽象的理念であり、『徒然草』に説かれる具体的日常の儉約とは、微妙に尺度が異なる。

むしろ、そこには北條時頼の祖父である泰時が中心になって制定した『御成敗式目（貞永式目）』第一条一、神社を修理し、祭祀を専らにすべき事」の「兼てまた有封の社に至つては、代々の符に任せ、小破の時は且修理を加へ、もし大破に及び子細を言上せば、その左右に随てその沙汰あるべし。」の社会的理念が踏まえられている。そのことで、下田が微妙に改作した松下禅尼の逸話の意味は拡大する。

そもそも『徒然草』の吉田兼好は、その（百九十段）で「家の内を行ひ治めたる女、いと口惜し。子など出で来て、かしづき愛したる、いと心憂し。」と良妻賢母論を否定し、彼女が全面肯定できる対象ではなかったはずである。下田は障子の逸話の後で、次の様に言う。

自分は鎌倉幕府執権職の母夫人、松下禅尼が親ら切張された明障子の前に端座して、愛児時頼に対し、温顔以て民治の要を説かる、処と、北米合衆国最初の大統領華盛頓の母堂が、白木巾の前垂に、麵麩粉に塗れたる手を拭きつ、錦衣故郷に還つた子息を凝視めて、「チョージよ、達者で帰つたか。御身が還つても差支へぬ丈、麦も積んである、乾酪も作つてある、安心して休養せよ」と言はれた、其の名利を度外視して、暗に実践躬行の踏を示された所の東西両個の賢婦、偉人賢相が母儀伝を読む毎に、髣髴として其の面影を想起し、覚ええず畏敬追慕の念の湧くを禁じ得ませぬ。北條氏数代の治世、北米現代の隆盛も、其の根本を温めれば、単へに賢母が揺籃を動かす手より揺り出されたものであることの確信を、益々強からしむるのであります。（267頁）

北条時頼の母松下禪尼と初代アメリカ大統領の母メアリー・ポール・ワシントンが、「実践躬行」という意味と価値で同定される。作者は不明であるが、『少女の友』（大正五年八月号）に、「ワシントンの母メリー」という文章が掲載されている。下田はそうした時空を超えた賢母の伝えには、「髣髴として其の面影を想起し、覚えざる畏敬追慕の念の湧くを禁じ得」ないと言う。この部分は大正二年の『日本の女性』では、「髣髴として其の面影を『幻出』であったが、昭和八年の増補改訂で、「幻出」を「想起」に改めた。揺れ動く幻想が、より深まって定着し、確かな理想が自発的記憶として甦ったのであろう。

この「賢母が揺籃を動かす手より揺り出」すということは、『帝国婦人協会設立趣意書』に「揺籃を揺るがすの手は、以て能く天下を動かす」と語られた表現と同様に、下田の思想的本質に関連する。その思想表現の特質は、歴史的文献や文学作品を典拠にしなが、主人公の内面の奥深く入って、歴史の中の女性の個性を把握して具体的に表現する所にある。

（註）

（一）本稿では、「下田歌子著作集 香雪叢書 第三卷 『日本の女性』（実践女学校出版部、一九三三年一月）を使用し、『日本の女性』（実業之日本社、一九一三年二月）も併用した。文字遣いなど旧字体を新字体に適宜変更した。一行あけて引用した下田の文章には、香雪叢書の頁数を（7頁）のように附けた。

『日本の女性』の目次は、第一章「序論」、第二章「古代文学に現はれたる女性」、第三章「活動せる上古の婦人」、第四章「中古の社会状態」、第五章「平安時代の婦人」、第六章「鎌倉時代の婦人界」、第七章「鎌倉時代の婦人」、第八章「南北朝足利幕府及び戦国時代の婦人界」、第九章「南北朝足利戦国時代の婦人」、第十章「徳川幕府時代の婦人界」、第十一章「徳川幕府時代の婦人」、第十二章「結論」と、各章内部の幾つかの節立てである。古代から近世日本まで、其々の時代を代表する六十六人の女性の章がある。

尚、本稿で取り上げた「香雪叢書 第三卷」の鎌倉時代の女性の章は「二、平政子」「三、建礼門院」「四、土肥次郎実平妻」「五、静女」「六、和泉三郎忠衡妻」「七、二条院讃岐」「八、阿仏尼」「九、松下禅尼」の節立てである。

- (2) 伊藤 由希子「日本女性の生の形・下田歌子の思想・序論」〔『死生学・応用倫理研究』東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター、二〇一二年三月〕。

- (3) 武田清子「日本文化のかくれた形」〔岩波書店、一九九一年十月〕。

- (4) 芳賀矢一「国民性十論」〔富山房、明治四十年十二月〕。

- (5) 石母田正「平家物語」〔岩波新書、一九五七年十一月〕。

- (6) 和辻哲郎「日本倫理想史」(二)〔岩波文庫、二〇一一年六月〕。

- (7) 永井路子「平家物語の女性たち」〔文藝春秋、二〇一一年六月〕。

- (8) 津田左右吉「文学に現はれたる我が国民思想の研究」(三)〔岩波文庫、一九七七年十一月〕。

- (9) 飯塚幸子・浪岡正継「帝国夫人協会設立主意書」にみる決意とその背景〔実践女子短期大学紀要 32 二〇一一年三月〕。